

ハワイ歳時記にみる文化変容 ① 新年の季語について

篠田左多江

Acculturation of the Season Words in *the Almanac* of the Japanese American Haiku Poetry in Hawaii ① The New Year

Sataye SHINODA

はじめに

アメリカ合衆国の50番目の州ハワイは、他の州とはその成り立ちがまったく異なっている。1778年ハワイ諸島にイギリス人ジェームズ・クックが上陸し、サンドイッチ・アイランドと命名してヨーロッパにその存在が知られたとき、島々はいくつかの首長国に分れていた。その後1810年までにカメハメハが諸島を征服・統一してカメハメハ王朝を樹立した。しかしその王朝も長くは続かず、イギリス、フランス、アメリカなどからの脅威にさらされることとなった。歴代の王は王朝を維持しようとさまざまな手段を試みるが、成功せずついにリリウオカラニ女王を最後に王朝の幕は閉じられた。アメリカ合衆国の準州となったハワイは、1959年に州に昇格する。このような成り立ちからハワイの特殊性は明らかである。ここはかつて精糖およびパイナップルなどのプランテーションを中心とした農業地域であった。労働力としてハワイ社会に導入されたのはおもに中国人、日本人などアジア系の人びとであった。日本人は1868年に初めてプランテーションのための出稼ぎ労働者として、ハワイに受け入れられた。

日本人移民の受け入れから120年の歳月を経て、ハワイにはいかなる日本の生活文化が残されているのであろうか。ハワイを構成するエスニック・グループを見ると、現在はアジア系がもっとも多く、ついで白人、ハワイ先住民となっている。ハワイは白人が人口の過半数を占めない合衆国の唯一の州である。アジア系のなかで最大のエスニック集団は日系人である。現在は全人口の約25%を占めているが、太平洋戦争前は46%にも達していた。さまざまな人種が暮らす多文化社会ハワイにおいて日本文化はどのような変容をとげたのか。本稿ではハワイで編纂された俳句歳時記のなかに含まれる季語について日本の歳時記と比較検討する。歳時記中に記された季語は、生活に即した事項を集めたものであり、生活を知る上での重要なキーワードである。ここでは限られた紙面のなかですべてを検討することは不可能であるので、ここでは新年の部に限定して論じる。

最近、山中速人の『ハワイ』および中嶋弓子の『ハワイ・さまよえる楽園』などハワイに関
国際コミュニケーション科 英語第1研究室

する優れた本が出版されているが、日系文学や生活文化に関する記述はない。この小論がその欠けた小さな部分を補うことになれば幸いである。

1. 日本人ハワイ移住の歴史

1868年6月19日、ハワイ、ホノルルのチャイナ棧橋に、印裨纏にももひきをはき、ちょんまげを切り落としたばかりのざんぎり頭に豆絞りの手拭いで鉢巻きをした異様ないでたちの日本人が列をなして降り立った。一行は横浜駐在のハワイ国総領事ヴァン・リード (Eugene Van Reed) の斡旋で渡航した日本人出稼ぎ労働者であった。

このときハワイは王国であった。古くポリネシア人によってもたらされた砂糖きびは、ハワイ人の食物であったが、1835年、カメハメハ三世 (King Kamehameha the Third) の時代にカウアイ島コロアに Koloa Sugar Plantation が設立されて、この時以来精糖業はハワイの主要な産業となった。当時、精糖業を営んでいた者は、19世紀初頭からアジア、太平洋への足がかりとして捕鯨などを通じてハワイに進出していた欧米人であった。彼らは十分な資金を生かして、プランテーションの経営に乗り出したが、土地所有権の確保、販路の確立、安価な労働力の確保が不可欠であった。ハワイ先住民は、その生活習慣からプランテーション労働者としては不適當であった。そこで1851年に中国人、続いて1878年からポルトガル人労働者が導入された。ポルトガル人はこの年から1884年までに9,000名あまりが入り、その他ノルウェー、ドイツからの契約労働者も導入されたが、輸送費がかかりすぎて採算が合わないという理由で中止された。中国人は「苦力」として苛酷な労働に従事したが、契約期間が終わると都市部へ移って商業などにたずさわる者が多く、農園労働者として定着しなかった。また、風俗習慣の上からもハワイ社会に馴染まないとして、ハワイ政府は1883年に中国人労働者の入国を禁止した。

中国人に代る労働者として迎えられたのが日本人であった。さきに述べた印裨纏姿の労働者は、明治元年に新政府の許可を受けずにひそかに日本をあとにした153名の男女であった。ヴァン・リードは1867年、徳川幕府との間に「日本ハワイ臨時親善協定」を結び、出稼ぎ労働者の斡旋をするつもりで、幕府から300人分の渡航印章（旅券）を下付されていた。しかし明治維新で政権が変わったために幕府の旅券は無効となり、新政府は出国を許可しなかった。そこで闇に紛れた違法な出国となった。彼らはおもに京浜地方で集められた出稼ぎ人で、「外国」という概念さえおぼつかなかった時代に、ハワイ行きは「天竺行き」であると理解していた。天竺でまとまった金を手にして帰国しようと希望をいできてきたこれらの人びとは、慣れぬ気候とことば、プランテーションでの奴隷に等しい苛酷な労働に絶望して、自殺者も出る惨状となった。一行は明治政府に窮状を訴え、救済を求めた。不法出国であったために交渉は難航したが、1870年ついに紛争は解決し、一行中の希望者41名が1月に日本政府の費用で帰国した。しかし、108名はハワイに残り、ハワイ人と結婚して社会に同化していった。彼らは「元

年者」と呼ばれ、ハワイ日系社会の基礎を築いた人びととして長く記憶されている。

この事件によって日本政府は、外国政府との交渉に不慣れなことを自覚し、移民送出には慎重になった。一方でハワイ政府は1871年、日本と「日布修交通商条約」を締結し、日本人を送るよう要請し続けた。さらにハワイは1875年、アメリカ合衆国との間に「米布互惠条約」を結ぶと、合衆国内の砂糖への関税が撤廃された。このため精糖産業の急速な発展が予測され、労働者不足がますます深刻になるのは目に見えていた。距離が近く輸送費も安価で、その上勤勉で農業に慣れている日本人労働者の獲得は、ハワイにとってぜひとも実現しなければならない急務となった。1881年、カラカウア王 (King Karakaua) はみずから日本を訪問し、明治天皇と会見して日本人移民の実現に努力した。この結果1885年、日本・ハワイ両国で取り交わした移民約定書にもとづき、日本人移民が続々とハワイに到着することとなった。同年2月8日、最初の日本人移民944名が帆船シティ・オヴ・トウキョウ号で到着した。元年者とは異なり政府間の約定に基づいた送出であるので、官約移民と呼ばれた。1886年には日布移民渡航条約が調印された。この形態の移民は1894年まで続き、合わせて29,069名がハワイへ渡った。

官約移民の終結とともに、日本政府は民間の移民会社に移民取り扱いを任せた。これは政府が直接統轄した移民とは異なって、私約移民と呼ばれた。移民会社は渡航希望者の手続きを代行し、渡航費用の貸し付け、船の切符から宿および就労の斡旋などすべてを準備した。会社を利用して渡航した移民は会社の用意した職場で、借入金を完済するまで働かねばならなかった。このため悪辣な業者も横行し、移民は借金返済のために不当に長い間労働を強いられるなどの弊害も生じたが、1900年までに会社を通じて約57,000名がハワイへ到着した。

1900年、ハワイ共和国はリリウオカラニ女王 (Queen Liliuokalani) の治世を最後にアメリカ合衆国に併合された。契約労働者の入国を禁じる合衆国の法律が適用されて、私約移民時代は終わりを告げ、自由移民時代を迎えた。この間にハワイへ来たのは、およそ71,000名もの日本人であった。彼らの中で、さらに高賃金を求めて合衆国本土へ行く者もかなりの数に上った。転航移民と呼ばれるこれらの人びとが本土で問題になり、やがてハワイにも波及した。すなわち、職を求めてハワイからやって来た日本人が目につくようになると、さっそくカリフォルニア州など本土西部沿岸地方で、排日の動きが現れた。1906年のサンフランシスコ学童差別事件などに端を発した排斥運動を鎮めようと、日本政府は自発的に合衆国と紳士協定を締結し、日本人移民の数を制限した。この結果1908年以降、移民としてハワイに入国できるのは、以前のハワイ居住者で再渡航する者および当時住んでいる移民の家族のみに限定された。

当初、出稼ぎのつもりでハワイへ来た人びともこの時代になると結婚適齢期を迎え、結婚して永住しようとするようになっていた。この時代はとくに写真結婚による花嫁の入国が盛んになった。また、すでに定住している父親が妻や子供たちを呼び寄せる場合も多く、呼び寄せ移民時代と呼ばれる。この期間に入国した写真結婚花嫁の数は約20,000名と推定される。しかし、この合理的な結婚手段も不道德であると白人からの非難的になった。この頃合衆国本

土では日本人移民排斥が激化し、1924年になるとついに日本人の移民は全面的に禁止となった。1908年から「1924年移民法」が発効するまでにハワイへ到着した日本人の総計はおよそ61,000名であった。

1924年に制定されたこの移民法は排日移民法と呼ばれ、日本人と特定してはいなかったが、アジア人すべてを対象とした人種差別的な法律であった。この法により第2次大戦後まで、日本人は合衆国移民割当ての枠外となった。さらに日本人は帰化不能外国人の烙印を押され、合衆国本土の日本人同様に、さまざまな権利を持たない二流市民の立場におかれていた。しかし、この時日本人は、日本へ帰国した少数の者を除けば、はっきりとハワイ永住の決心をかためる結果となったのである。

1941年12月7日の日本軍による真珠湾攻撃と日米戦争は、ハワイの日系人に大打撃を与えたことは言うまでもない。攻撃の翌日から日系社会の指導的立場にあった人びとで、とくに日本との係わりが深いと思われた人びとは、FBIによって逮捕、拘禁された⁽²⁾。合衆国本土の日系人が強制収容所へ送られたのとは対照的に、ハワイでは一般の日系人の収容は実施されなかった。地理的には本土よりも日本に近く、さまざまなスパイ活動やサボタージュのデマが流れたにもかかわらず収容されなかったことは、日系人がハワイ社会で重要な役割を果たしていたからにほかならない。本土において強制収容された日系人は12万、ハワイ日系人はそれよりもはるかに多い16万が存在したが、この中で本土の強制収容所へ送られたのはわずか1,875名にすぎなかった。日系人を収容所へ送れば、ハワイの農業や漁業はたちまち混乱に陥るのは明らかであった。真珠湾攻撃の直後に任務についてハワイ防衛総司令官デロス・エモンズ(Delos C. Emmons)大將は、日系人に疑われているようなスパイなどの事実はないこと、人口の46%を占める日系人を失うことはハワイ経済にとって大打撃であるなどの理由をあげて、ワシントンの軍事当局を説得したのである。

この結果、日系人がアメリカに忠誠であることを証明しようと多くの若者が志願兵となった。本土では3,000名の志願兵募集に応募者が1,200名であったのに対し、ハワイでは1,500名の募集に1万名が応募した。これらの若者は、日系人のみで構成された第100歩兵大隊となり、のちに本土の兵士と合流して第442連隊戦闘部隊となってヨーロッパ戦線で戦った。彼らのあいことば“Go for Broke”(当たって砕けろ)とともに日系人部隊の勇敢な戦いぶりは有名になったが、この主力をなしていたのがハワイの若者であった。

戦後、強制収容のなかったハワイの日系人は、いちはやく立ち直ることができた。本土の日系人が収容所から出て財産のほとんどを失い、ゼロから出発したのは大きな差があった。とくに従軍して合衆国に忠誠であることを証明した若者たちは、帰還後「GIビル」⁽³⁾によりハワイ大学および本土の大学で高等教育を受け、政界に進出したり、弁護士など専門職についた者が多かった。ハワイ準州議員をはじめとして、日系の公務員も多く誕生した。1959年にハワイが50番目の州に昇格すると、ダニエル・イノウエは日系人初の上院議員となった。戦後

の日系社会の主導権は二世に移り、さらに帰還兵出身でのちにエリートとなった人びとの活躍で、日系社会はこれまでにない発展をとげることとなった。さらに1974年、ジョージ・アリオシが州知事に就任し、合衆国初の日系人州知事となった。

ハワイはかつて王国であり、1898年に合衆国に併合されて以来、準州という扱いを受けていた。したがってその住民は、合衆国の他の州の人びとと同等の権利を持たず、つねに「二流市民」に甘んじていた。そして日系人は、白人主導のハワイ社会で、さらに下の立場におかれていた。すなわち二重の差別を受けていたことになる。しかしその勤勉さ、辛抱強さ、向上心、努力などによって、100年余りの苦闘ののち、社会の指導的立場に立つことができた。かつての精糖産業、パイナップル産業が姿を消した現在、観光立国となったハワイには日本本土からの資本が進出し、ハワイ社会の伝統や文化を無視して利潤を追い求め、社会に深刻な問題を投げかけている。1980年の日系人人口は約24万で、アジア系のなかではもっとも多く、ハワイ先住民をしのいでいる。だが、高学歴の日系人は満足できる仕事のないハワイに留まらず、本土へ移る人びとが年ごとに増加しているなど、さまざまな問題を抱えている現状である。

II. ハワイにおける日本文化

前章で述べた通り、ハワイへの初期の日本人移民は出稼ぎを目的としていた。日本政府も短期滞在を前提に日本人を送った。したがって彼らはハワイ社会に同化するための特別な努力をせず、日本の風俗習慣を持ち込んで生活した。砂糖きびプランテーションではエスニックごとに生活区域が決められて、日常生活の場で多くのエスニックグループが交流することはなかった。精糖会社は、労働者がエスニックを越えて団結し、ストライキなどの手段に訴えて待遇改善を迫るのを恐れたからであった。また、エスニックによって賃金が異なっていたことも、労働者が分断されていた理由のひとつである。賃金は白人がもっとも高く、次いでハワイ先住民の順で、中国人、フィリピン人、日本人などアジア系はもっとも低い賃金に抑えられていた。

このような事情からそれぞれのプランテーションに日本人の生活集団があり、一方でコナやホノルルなどの都市部には契約満了後の労働者が集ってさまざまな職業に就き、日本人街が形成された。ハワイの日本人コミュニティはこれら二つの集団によって構成されていた。プランテーション労働者は経済的余裕がなかったため、男女ともに日本から持ってきた縞模様の本綿の仕事着を現地の労働条件に合うように縫い直して着用し、家にいるときは所持してきた浴衣などを着ることが多かった。彼らはできるだけ生活費を切り詰め、1セントでも多く貯金するかあるいは郷里へ送金した。1897年のオアフ島エワ耕地の日本人小学校の記念写真では、学童の3分の1以上と女性教師が和服姿である。1920年代になっても記念写真などを見る限り、女性全員が和服を着用するなど日本の風俗が維持されていた。

都市においては、賭博、売春などの横行する特殊な区域が日本人町のなかに出現して、単身で来た出稼ぎ労働者を誘惑していた。当時、ホノルルのパウアヒおよびヌアヌ、スミス街は飲

楽街として悪名高かったという。1920年代まで「ホノルル芸者」も存在したと記録されている。1900年までの日系人社会の男女比が男子4に対して女子1であったばかりでなく、健全な娯楽に乏しい生活環境のなせるわざであった。

1910年代には日本から多くの写真結婚花嫁が到着して、数の上の男女の差は次第に縮小し、労働者の賭博、買春、飲酒の悪習慣も徐々に少なくなった。しかし大勢の写真結婚花嫁は、細帯をまきつけて浴衣にげたばきという姿で町を歩き、他人の目の前で胸をはだけて授乳することもあり、他のアメリカ人から奇異の目で見られた。これは日本人排斥を唱える人びとの攻撃の対象となったため、これを契機として日本人コミュニティで生活改善運動が始まった。これより20年も前の1887年、すでに美山貫一牧師は安藤太郎総領事とともに禁酒運動を始めて、日本人コミュニティの改善につとめたこともあった。1910年代の日本人社会は出稼ぎから永住へ移る時期であった。したがって「旅の恥はかきすて」というようなその場かぎりの生活態度は許されなくなっていた。

日本人排斥の気運が高まると、日本人コミュニティの指導者は「米化運動」(Americanization)を進めた。1914年ころのことである。日本人がハワイ社会に同化していないことが原因で排日が起こると考えた人びとは、服装、住居、食物などを含めた生活習慣をアメリカ風に改める運動を推進したのである。しかし日系人はプランテーション内で最大のエスニックグループを形成して、日本的な生活様式で十分に生活が可能であったことから、米化運動は遅々と進まなかった。男子の服装はアメリカ風になったが、女子の和服は根強く続き、とくに正装は必ず和服とされた。しかし服装改善運動が熱心に行なわれた結果、日常のだらしない浴衣姿などは姿を消した。米化運動は、この他にも冠婚葬祭の簡素化、虚礼廃止、時間厳守の励行、英語、アメリカの常識と礼儀の習得、地元への投資など巾広く進められた。

日本人がハワイにもたらした文化と伝統は多岐にわたっており、この小論ですべてを網羅するのは難しい。ここでは『ハワイ歳時記』の新年の慣習の背景について述べるにとどめる。新年の行事の第1にあげられる初詣の対象は神社および寺院である。神道はどのように移入されたのであろうか。日本はかつて侵略したアジア諸国に神社を建てた。たとえばシンガポールに建てられた「昭南神社」などは国策として国家神道が持ち込まれた1例である。一方、ハワイの神社はすべて個人によって設立され、宗教団体として州政府の認可を受けている。日本では昔から「氏神」がコミュニティの人びとの守護神として祀られ、信仰の対象となっている。ハワイに渡った日本人もコミュニティのなかに神を祀ることによって、心のより所を得ようとしたのであろう。現在、州内には10ヵ所の神社があるが、そのうちの2神社がハワイ島、マウイ島にあるほかはすべてホノルルにある。もっとも古い神社は布哇大神宮で1904年に、次いで布哇出雲大社分院および布哇加藤神社が1906年に創立された。合衆国本土では第2次大戦を契機として神道は禁止された。ハワイでも同様に禁止されたが、ここでは1950年代末に復活した。たとえば古い歴史をもつ布哇大神宮は、1904年に千屋まつえという女性が、天照

大神、清正公などを祀ったのが始まりであるという。現在は天照大神を主神として、ほかにジョージ・ワシントン、エイブラハム・リンカン、カメハメハ一世を祀っている。これは、先祖崇敬という日本人の伝統の継承であるが、日本の古来の神に加えて、合衆国、ハワイの歴史上の重要人物をも信仰の対象としたことで、ハワイ社会への同化を示している。合衆国では神道が国家神道、日本軍国主義のシンボルであるとして禁止されたが、ハワイの神道は再開され、布哇大神宮のように状況にうまく順応することでかろうじて生き残っている。

日本人移民が広島、山口、福島などの農村の出身で浄土真宗の信徒が大多数を占めたことから、仏教の布教は容易であったと考えられるであろうが、事實は違っていた。ハワイ王国の国教はキリスト教であったため、1886年にいわゆる「元年者」移民が到着すると、キリスト教の布教が開始された。初期は通訳つきの英語による伝道であったが、翌年サンフランシスコからメソジスト教会の美山貫一牧師が着任して、日本人移民への布教と社会事業に専念し、多大の成果をあげた。このような当時の状況下で仏教は異教であり、移民のアメリカ化を妨げるものとみなされて布教は困難であった。1889年にはじめて真宗の僧侶による仏教の私的な布教活動が開始された。仏教も神道と同様に、アメリカ文化と相いれない宗教であるという非難をまず克服しなければならなかった。真宗本派本願寺がハワイを布教の地と定め、本格的に開教使を送りこんで布教に乗り出したのは1897年であった。開教使は他のエスニック・グループからの誤解や嫌悪を除くために努力し、キリスト教のように日曜学校を設け、仏教青年会、婦人会などの社会事業をはじめると移民の生活改善に貢献したために、次第に発展してハワイ全土に根を下ろしていった。寺院の数は真宗本派本願寺がもっとも多く、次いで浄土宗、真言宗となっている。戦後、仏教は日系人の宗教という範囲を越えて広く一般のアメリカ人の中にも浸透している。

日米戦争が勃発するとさらに拍車をかけて米化運動が促進された。日本語を話さないことはもちろん、その他の日本文化もすべて否定して、日系人は合衆国に忠誠であることを示さねばならなかった。しかし、Iで述べたようにハワイからの志願兵が戦争で勇敢に戦ったことにより日系人の忠誠が証明されると、戦後のハワイでふたたび日本の文化や習慣は息を吹きかえした。多くの戦争花嫁がハワイに到着し、彼女らが途絶えかけていた日本文化に活気を与えた。1950年代は日本文化の隆盛期となった。歳時記中にある茶の湯、日本舞踊などは、戦前も多少は行われたようであるが、とくに盛んになったのは戦後の1950年代からである。文化交流の名のもとに日本から茶道や日本舞踊の家元が訪れて、多くの人びとの前でその技を披露した。50年代以降はエスニックを問わず、ハワイの人びとが直接、日本文化に触れる機会はますます多くなった。

70年代になるとブラックパワー運動に刺激されて、合衆国本土の西海岸地方でもアジア系の若者たちの間にイエローパワー運動が起こった。これらのエスニック・グループの主張はハワイにも波及し、70年代にはハワイ先住民の権利獲得運動をはじめとしてエスニック・リバ

イバルが起こった。失われたハワイ文化を復活させ、ハワイ系であることへの誇りを取り戻そうとする運動である。このような考えはハワイ社会全体で大きな流れとなり、それぞれのエスニック・グループの自覚を促すこととなった。日系人も三世を中心として日本文化への関心が高まり、たとえば餅搗きや節分といった伝統行事にも年配者ばかりでなく、若者たちも参加するようになった。現在でもこのような行事が維持されているのは、この時以来の日系人の努力が実ったからであろう。

1980年の人口統計によれば、ハワイ州では白人が34.4%、アジア系が46.9%、ハワイおよび太平洋諸島系が14.3%で、本土とは全く異なる人口構成となっている。このような事実から、圧倒的なマジョリティ・グループが存在しないことが、ハワイの特色となっている。このため、それぞれのエスニック・グループが調和しつつ、自己の伝統文化を主張できる状況が見られる。それゆえ、合衆国本土とは異なって神道の教団もわずかではあるが存続し、新年の初詣などの伝統も維持されているといえよう。

III. ハワイ俳壇の歴史

ハワイにおける短詩形文学は合衆国本土の場合と同様に、新聞とともに始まった。ハワイ最初の日本語新聞は、1892年に移民監督官出身の小野目文一郎がホノルルで創刊した『日本週報』であった。つぎに翌年、日本人参政権回復のための組織「ハワイ日本人同盟会」の内田重吉が『布哇新聞』を発行した。これら2紙はいずれも謄写版刷りであった。本格的な活字印刷の最初の日刊紙は『布哇新報』で、1894年から1926年まで続いた。日本人コミュニティはホノルルやヒロなどの都市の他、それぞれの島のプランテーションに散在しており、当時の未発達なコミュニケーション手段では、速やかなニュースの伝達は困難であった。島から島へ新聞を輸送するのもすべて船に頼らねばならなかった。したがって島ごとに新聞が発行され、その数は本土と比較すると狭い地域の割には多かったといえよう。これらの新聞は作品の発表の場を提供し、読者にも投稿を勧め、短詩形文学を育てていった。本格的な短詩系文学活動が盛んになるのは、1910年代に、かつての出稼ぎ労働者が結婚して、永住の時代になってからである。

ハワイにおける俳句結社の歴史はたいへん古く、1901年にアオフ島エワ・プランテーション(Ewa Plantation)に作られた「エワ土曜会」が最初であるとされている。当時アオフ島には7つのプランテーションがあり、エワは中規模プランテーションで、古くから多くの日本人労働者が働いていた。不熟練労働者として働きはじめた日本人は日々の労働に疲れはて、仕事が終わればただ眠るだけといった生活であった。しかし20世紀にはいと、労働のみに明け暮れた悲惨な生活から抜け出し、俳句を詠むゆとりも生まれたのであろう。2年後の1903年、ハワイ島ヒロ市に「ヒロ蕉雨会」が生まれた。1961年の『ハワイタイムス』の記事によれば、このとき会員は12名、横山松青、尾崎無音、川添堅風、品川玉兔などの名が挙げられている。この会は現在も続いており、海外における最古の俳句会といえることができる。

1927年、ホノルルで藤井豊村、川本恵子らが「青夏吟社」を組織し、日本の俳句誌『ゆく春』の主宰者・室積徂春の指導を受けた。この会は戦後、「布哇ゆく春会青夏吟社」と名を変えて、日本の「ゆく春」俳句会に師事し、室積の没後もその後継者・平川巴竹に師事している。「ヒロ蕉雨会」も1930年以來、室積徂春、平川巴竹に師事して「ヒロゆく春会」となった。『ゆく春』に参加している人びとはハワイ島の他の地域にも存在し、1927年に「コナゆく春会」、「コハラゆく春会」および「ハマクアゆく春会」が発足して現在に至っている。

1908年、オアフ島パラマで奥村物外、芳賀華外、内田春涯らによって「水無月会」が発足した。この会は1911年から機関誌『うきくさ』を発行し、エワやアイエアからも参加者があった。アイエアはホノルルプランテーションの所在地であることから、これらの俳句会はいずれもプランテーション住宅に住む人びとの趣味の集りであったことが分る。短命に終わったが、1909年には増田玉穂が文芸誌『火星』を発行、1910年代は各地の俳句会が互いに交流して、俳句隆盛時代を迎えた。

短詩形文学を中心とした文芸誌で10号まで続いたものはほとんどなかった。『火星』は7号、『うきくさ』は8号で終わり、つぎに井田東華によって創刊された『高潮』も8号で終わった。盛衰が激しかったのは文芸誌だけではなく、俳句会もつぎつぎに現れては消えていった。それらの名をあげると、青木虚舟の「村雨会」、古屋翠溪の「サウス会」、「海の雨会」、「夜の虹会」などである。「海の雨会」は1912年に組織されて、機関誌『野の鶏』を発行した自由律俳句の会で、1926年から「布哇俳句会」と名を変えた。日本の『層雲』の主宰者荻原井泉水の指導を受けて活発な活動を行ない、現在もなお多くの会員が句集を出版している。俳句の会は精糖プランテーションだけでなくパイナップル農園でも組織された。時代が下るとオアフ島中央部のワヒアワ高原 (Wahiawa Heights) のパイナップル農園で「蕉葉会」がつくられ、1927年、「高原吟社」と改名したが、のちに自由律俳句に変わって「布哇俳句会」に加わった。このほか、1948年創立のハワイ島「コナ・エコー吟社」、1966年に発足した「あざみハワイ支部」など現在も活動を続けている。

俳句の担い手は、おもに日本語を第1言語とする一世、呼び寄せ一世⁽⁴⁾、帰米二世である。ハワイでは古くから日本語学校が開設されて、多数の日系人が日本語教育を受けたが、俳句結社に加わっている二世のほとんどは日本で教育を受けた帰米二世である。ハワイの日本語学校だけで日本語教育を終えたものはほとんどいない。戦後はこれらの人びとに戦争花嫁などアメリカ人と結婚した女性たち、戦後の移住者が加わった。現在、一世はほとんど亡くなってしまい、呼び寄せ一世、帰米二世も高齢になって、だんだんと数が減少している。これからは戦後移住者が活動の中心になるであろう。仕事の合間に短時間で創作できる短詩形文学の愛好者は多く、ハワイの俳句結社はこれからも続いていくと思われる。最近は一瞬の情景を3行の英文で表わす“Haiku”がさまざまな人種のアメリカー人の間で一般的になり、小中学校の国語（英語）教育でも実践されるなど新しい傾向が生まれ、俳句の世界は広がりを見せている。

IV. 『ハワイ歳時記』

『ハワイ歳時記』は、1970年「布哇ゆく春会ホノルル青夏吟社」の創立当時のメンバーである元山玉萩によって編集された。俳句を詠む際に欠かせない『歳時記』は、東京と京都、大阪を結ぶ緯度を中心に編集されているため、それぞれの地方に独特の風物が含まれていない。ハワイで俳句をつくる時に不便を感じていた人びとは、自分たちでハワイの風物を歳時記にまとめようと思い立った。元山らは室積徂春に師事していた頃から編集に着手し、10年の歳月を費やして完成したという。日本の歳時記と同様に、1年を春夏秋冬の四季および新年の5つに分け、それぞれに時候、天文、地理、人事、行事、動物、植物を列挙している。さらにこれらに分類できない無季の動植物をまとめて「雑の部」としている。項目は合計673で、それぞれに類似語が示してある。すべてを含めると1,000項目を越す大規模な歳時記である。亜熱帯に属しているハワイの気候は、日本とはまったく異なっている。したがって四季の区分も、1月から4月までを春、5月から8月までを夏、9月から11月を秋、12月のみを冬としている。日本に住む人はハワイを常夏の国と認識しているが、12月など朝夕は冷え込むことがあり、ハワイ島の高い山々ではスキーができるほどの積雪がある。ハワイに住む人びとは微妙な季節の移り変りをとらえて季語としている。

本稿では新年について日本の『ゆく春歳時記』の内容と比較検討する。『ゆく春歳時記』は、『ハワイ歳時記』の編者が師事している日本の俳句結社「ゆく春」の代表・平川巴竹が編集したもので、2,500の季語を集めている。日本では、山本健吉、楠本憲吉、水原秋桜子などが編纂した歳時記が有名であるが、ここでは編者元山玉萩と日本の「ゆく春会」が師弟関係にあることから、比較には『ゆく春歳時記』が適当であると考えられる。

	ハワイ歳時記	ゆく春歳時記 (日本)
時候	一月／正月 一月一日／元旦／初春／ 年改まる／今朝の春／初日	一月／正月 新年／元日／初春／去年今年／松の内／ 松明け／松過ぎ／小正月／女正月／二十日正月
天文	三山初霞／初ケア	初明り／初空／初日／初日の出／初晴／初東風 初凧／初東雲／初茜／初霞 御降／淑気
地理		初富士／初景色
人事	初暦／初カレンダー	門松／松飾／注連飾／輪飾／御慶／若水

	<p>ニウカレンダー</p> <p>年賀状／賀状</p> <p>初放送／初放写／初映画</p> <p>初茶湯／初釜／初点茶</p> <p>舞初め／弾き初め／謡い初め</p> <p>吹き初め／初音楽会／初刷り</p> <p>初句会／新年句会／初披講</p> <p>カイツ／凧／いかのぼり</p> <p>凧上げ大会／初景気</p> <p>棚卸セール／棚卸休業</p> <p>新年宴会／ニウイアーパーティ</p> <p>新年懇親会／新年囲碁会</p> <p>新年将棋大会</p>	<p>蓬莱／飾海老／飾臼／鏡餅／屠蘇／切山椒</p> <p>雑煮／初手水／ごまめ／数の子／節料理</p> <p>お節／大箸／柳箸／年酒／年賀／傀儡師</p> <p>年玉／賀状／鳥追ひ／初電話／初放送</p> <p>初電車／初せり／初旅／初暦／初日記</p> <p>初燈／初湯／初竈／初髪／初鏡／初化粧</p> <p>初写真／春着／謡初め／読初め／書初め</p> <p>筆初め／吉書／初硯／初席／初芝居／初稽古</p> <p>初舞／舞初／弾初め／初句会／出初／初みくじ</p> <p>縫初／初針／初釜／初点前／初荷／初便</p> <p>初場所／初刷／初笑／初夢／猿枕／福引</p> <p>売初め／初売／買初め／初買／福笑い／御用始</p> <p>事務始／仕事始／初仕事／掃初め／初帚</p>
行事	<p>新年祭／歳旦祭／除夜祭／年始</p> <p>大祓式／初詣／元旦祝賀式</p> <p>年賀交換／元旦礼拝／修正会</p> <p>新年祈祷会／年頭教書／水仙祭</p> <p>ナシス祭／水仙女王／旧正月</p> <p>支那正月</p>	<p>鍬初め／初鍬／初漁／漁始／山始／船起し</p> <p>斧始／獅子舞／歌留多／双六／追羽根／羽子板</p> <p>羽根／独楽／宝舟／かまくら／鏡開き／寝正月</p> <p>初詣／白求詣／恵方／七福神詣／破魔矢</p> <p>初甲子／初大黒／初観音／初庚申／初巳／初弁天</p> <p>初天神／初大師／初不動／初護摩／初戎／十日戎</p> <p>達磨市／鶯替／松納め／門松とる／鳥總松</p> <p>若菜摘む／七草／七種／七草粥／小豆粥／餅花</p> <p>繭玉／左義長／どんど／成人の日</p>
動物	<p>初マイナ／初雀／初鶏</p>	<p>初雀／初鶏／初鴉／伊勢海老／嫁ヶ君</p>
植物	<p>水菜</p>	<p>裏白／薺／福寿草</p>

ふたつの歳時記を表にして比較してみると、ハワイと日本の生活の差異が浮び上がってくる。ハワイといえどもアメリカ合衆国の一州であるから、新年は元旦のみが休日で、2日からは平常の生活となる。したがって3日間をゆっくり休んで正月気分には浸るといった習慣はない。むしろ大晦日の深夜からパーティを開いて、新年を迎えるまで楽しく賑やかに過ごすというアメリカの習慣にしたがっている。さらに中国の新年に必ず使われる爆竹も日系人の間に浸透している。日系人の家庭では雑煮を食べることもあるようだが、五世が生まれている現状では、寿

司や日本ふうな煮物に加えてフライドチキン、ハワイ風ポーク料理などさまざまな種類のご馳走を食卓に並べて新年を祝うのが一般的である。日本のような門松の習慣は残っておらず、したがって「松の内」という概念もない。

時候、天文、地理に関する日本の新年の季語はたいへん豊富である。元旦の日の出を表わすにも「初日」「初東雲」、「初空」などさまざまな表現があるが、ハワイでは「初日」のみにとどまっている。英語の世界のなかでかろうじて日本語を守って作句しているハワイの俳人は、豊かな日本語表現を少しづつ失ってしまったといえよう。日本歳時記の「初富士」は、ハワイでは「初ケア」である。ケアとはハワイ島のマウナケアをさす。この山は 4,206メートルで富士山よりも高く、新年には頂上に雪をいただいて美しく、日本の富士と同様にハワイ島のシンボルとなっている。1909年の新聞に載ったマウナケア山についてのエッセイには、「太陽の光が大海原の波間から射し昇るのに映じて、紫色の雲が其皮を一枚々々剥がれて行く中からヌット顔を出すマウナケアの高嶺、白雪の皓々として朝日に映ずる姿を見れば、何んとも得言はれぬ崇高の念が起るのである・・・⁽⁵⁾」とある。これはヒロ市からの眺めであるが、一世はケアに富士山を重ねて見たのであろう。

初ケアの富士に似て住む半世紀

村上五橋城

黎明の初ケア平和語るかに

安藤南茶⁽⁶⁾

「三山初霞」の三山とはマウイ島のハレアカラ、ハワイ島のマウナケア、マウナロアをさす。これらの山やまが新年にかすみたつことを表わしている。日本ではまだ暦ということばが使われているが、ハワイでは「初カレンダー」「ニウカレンダー」が一般的であろう。

初カレンダー掛けて楽しく屠蘇祝う

浜田市代

移民史へ百一年を初暦

内田浮草⁽⁷⁾

ハワイにも「年賀状」という季語があるが、すべてのアメリカ人がクリスチャンというわけではないので、クリスマスカードではなく、グリーティングカードに新年の挨拶を書いたものを取り交わす習慣がある。年配の人びとはそれを年賀状と称している。

忘れいし人の年賀の文たのし

中山尚月

年賀状一句を乗せて贈りけり

幸地南枝⁽⁸⁾

「初放送」は日本、ハワイ共通の季語になっている。ハワイでは1928年から1日にわずか30分ではあるが、ラジオの日本語放送が開始された。日本語を使う人が多かったため、放送

時間は延長されて、1936年には日本語のみを使うラジオ局が開設された。日米戦争中、日本語は禁止されたが戦後に復活し、現在もKZOOおよびKOHQの2局が終日、日本語放送を行なっている。「初放送」はこれらの日本語放送を指す。日系放送局では元旦に特別番組を放送する。「初放写」はテレビ放映を意味するハワイ独特の日本語である。「放映」が、日本語にはない「放写」という表現に変化している。

ハワイではさまざまな日本文化が伝えられ、継承されている。季語をみるとどのようなものが残っているか明らかになる。日本舞踊は「舞初め」、邦楽は「弾き初め」、謡曲は「謡い初め」で、それぞれに諸流派があり、今もなおハワイの日系人に継承されている。茶の湯については、日本では「初釜」または「初点前」であるのに、ハワイでは従来の「初釜」のほかに「初茶湯」、「初点茶」と表現されている。これは「初釜」では分りにくいため、誰にも理解しやすく変えたハワイ独特の表現であると思われる。これと同様に「初音楽会」はオーケストラなどの新年コンサートを連想させるが、ハワイでは尺八、三味線、琴を主とした演奏をさす。「吹き初め」は尺八を吹くことである。日本では横笛などさまざまな和楽器を吹くという意味である。戦前のハワイでは尺八が盛んであったが、現在では1流派のみという。

「初刷り」は日本の季語にもあるが、ハワイで詠まれているのはやはり元旦の日系新聞であろう。現在日系新聞は週刊の『ハワイタイムス』、日刊の『布哇報知』の2紙があり、日英の2ヵ国語で書かれている。日本語欄には俳句、短歌、川柳などの文芸欄があり、新年号には短詩形文学および短編小説など作品の公募があって、選考結果とその作品が発表される。俳句を趣味とする人びとには待ち遠しい「初刷り」である。

日本の正月に欠かせない遊び「追羽根」、「羽子板」、「独楽」、「歌留多」などはハワイにはないが、「カイツ」(kites)、「凧」、「いかのぼり」、「凧上げ大会」など凧を示す季語が多い。一方、日本の歳時記には「凧上げ」に関するものが見当たらない。ハワイでは1月から2月にかけて吹く強い東風を利用して大人も子供も凧上げを楽しむ。ハワイ先住民独特の模様を描いた菱形の凧がビーチに舞い上がっているのをよく見かけることがある。これは日本、中国、アメリカに共通の遊びであるゆえに、多くの人が楽しんでいることが分る。ハワイの空に舞う凧は、アメリカ風、先住民風の凧に加えて、日本の奴凧、絵凧、中国の連凧などがあり、ハワイ社会の多様なエスニックを反映している。

凧の子等夢は宇宙を翔ける旅
遠い日の夢をたぐりぬ凧の糸

長門秋峯⁽⁹⁾

川本恵子⁽¹⁰⁾

新聞の「初刷り」や新年の俳句会「初句会」などは日本、ハワイともに同じであるが、初期のハワイ移民の生活をしのばせる季語がある。それは「初景気」である。これは好況を示すことばではなく、年の初めにプランテーションの会社（一般に精糖会社）から「勘定」（給料の

決済)を受け取ることをさしている。労働者は一時的に多額の収入を受け取るため、心弾んで、買物や遊びに出かける。そのさまは次の句から想像することができる。

初景気母に子供に分ちけり
初景気里より街へ押し寄せぬ

赤川仙兵衛
重兼花雪⁽¹¹⁾

もうひとつハワイ独特の季語に「棚卸セール」、「棚卸休業」がある。これは商店がクリスマスのセールのあとに、2、3日休んで商品を点検し、その後に1年の総決算としてバーゲンセールを行なうことを指している。日本でも新年早々にバーゲンセールが始まるが、季語としては見過ごされている。気候の変化に乏しいハワイの俳人は、ショッピングモールのバーゲンセールにも新年の季節感を味わうのかもしれない。

日本の季語に「新年会」があるが、ハワイにも同様に「新年宴会」、「ニウイアーパーティ」、「新年懇親会」がある。県人会などの日系諸団体、教会などは年に1度の定期総会を行ない、その後、宴会を催すという。俳句を趣味とする人びとは、主として日本語を使って生活している人が多いことから、同郷の親しい友人と過ごす宴は待遠しいものであろう。古くからの友人に会えば、方言も飛び出すかもしれない。

方言で語り親しむ新年会
新年会竹馬の明治甦る

丹治まい
元山玉萩⁽¹²⁾

「新年囲碁会」、「新年将棋大会」が季語としてあるところをみると、ハワイでは囲碁、将棋が盛んであると思われる。囲碁はハワイ棋院を中心に日系人だけでなく、他のエスニックの人びとも好まれているという。

『ゆく春歳時記』では新年行事に関する季語が省略されているため、完全な比較は不可能であるが、両歳時記に掲載された季語の範囲で比較してみることにする。ハワイでも大晦日から元旦にかけて神社へ参詣する初詣が行なわれている。しかし、日本のように氏神は存在しないので、神社の数も少なく、したがって初詣も限定された地域でのみ行なわれる。人びとは12月31日午前0時を過ぎると神社へ参詣する。神社ではこのとき、世界平和、日米親善、ハワイ繁栄、家内安全を祈願するという。一方日本の初詣は、白求詣、七福神詣、初大師、初観音など神社、仏閣の種類の高さを反映してさまざまな季語で表わされている。

初詣椰子に輝く星一つ
初詣心晴れてか忘れ傘

泉 流水⁽¹³⁾
青木紫峰⁽¹⁴⁾

「元旦祝賀式」、「年賀交換」は日本総領事館で行なわれる年賀の挨拶の会を指す。「元旦礼拝」は、キリスト教会、「修正会」は西本願寺派仏教会で、「新年祈祷会」は日蓮宗仏教会でそれぞれ行なわれる元旦の朝の行事である。ハワイが合衆国の1州であることをうかがわせる季語は「年頭教書」である。これは大統領が年の初めに発表する大統領教書をさす。テレビや新聞で大きく報道され、人びとの関心を集める。

為政者の意欲年頭教書かな
白鳩や年頭教書和の誓言

内田浮草
北川人魚⁽¹⁵⁾

「水仙祭」「ナシシス祭」「旧正月」「支那正月⁽¹⁶⁾」はいずれも中国系の人びとの正月の行事である。中国系の人々は旧暦の正月を祝う。「水仙祭」(Narcissus Festival)は旧正月に中国系商工会などの主催で、チャイナタウンで行なわれ、「水仙女王」が選ばれる。水仙は中国の新年を象徴する花で、ハワイでは輸入した球根を水栽培で咲かせる。爆竹、獅子舞などが賑やかに繰り広げられる祭で、日系人もともに楽しむのであろう。ハワイならではの季語である。

水仙祭文化を誇る中華人
水仙祭祖先敬慕の民ゆかし

日の宮道人
明本浦灯⁽¹⁷⁾

新年の鳥に関する季語は、日本では「初鶏」、「初雀」、「初鶯」などであるが、ハワイでは「初マイナ」である。マイナはハワイ諸島のいたるところに見られる鳥で、きじばとより少し小型だが、独特のせわしい鳴き声が特色である。もちろんハワイにも鶏や雀は存在するが、何と言ってもハワイの特徴をもっともよく表わしたものは「初マイナ」という季語であろう。

コーヒーの梢明るし初マイナ
初マイナ起きよ起きよと鳴き立てる

西本貞子
片野耕村⁽¹⁸⁾

初鶏や希望の窓の展けゆく
ケアの嶺白し初鶏高らかに

泉 流水
中西美沙⁽¹⁹⁾

新年の植物に関する季語はただひとつ「水菜」である。これは雑煮に入れる菜で、句から想像すると、日本の水菜（関東地方では京菜）を指すと思われる。年の暮れになるとスーパーマーケットに水菜がならんで、季節を感じさせるという。また、ハワイで雑煮の習慣を捨てていない人がいることが次の句から読みとれる。

妻語る古きしきたり水菜餅
老妻と祝う雑煮の水菜かな

氏家睦川
田熊山里⁽²⁰⁾

季語を比較してみると、日本の伝統的な新年の行事は、生活様式の違いからほんの1部がハワイで継承されているにすぎず、豊かな言語表現も失われている。とくに宗教に関して、日本では「初観音」、「初大師」などさまざまな信仰の対象が個別に表現されているのに対し、ハワイでは仏教、神道、キリスト教などがそれぞれ1または2の季語で表わされている。いくつかの季語には、日本にはないハワイ独特の日本語表現が創り出されている。「初点茶」、「初放写」などはその例である。一方、年頭教書は日本にはないアメリカのものであるし、「初景気」はかつてのプランテーションの生活をしのばせる歴史的な意味を持つ。さらに「水仙祭」などハワイ独特の他のエスニックの新年行事が加えられていることが分かる。

おわりに

海外で日本人の手で編集された本格的な俳句の歳時記には、本稿で扱った『ハワイ歳時記』の他にフィリピンの「マニラ句会」による『フィリピン歳時記⁽²¹⁾』がある。「マニラ句会」には、フィリピンの日系人も参加しているが、大部分のメンバーは日本からの一時滞在者である。したがって日系人の歳時記としては、この『ハワイ歳時記』が最大で唯一のものと考えられる。ハワイは日本人移住の歴史が古く、海外最古の俳句結社があり本格的な歳時記が生まれる土壌が整っていた。

この歳時記の担い手たちは、かつて日本人がもたらした伝統文化を細々と守りつづけてきた。二世はハワイで、合衆国の民主主義教育を受け、アメリカ文化を身につけた。彼らの好物はハンバーガーやホットドッグであり、ベープ・ルースに憧れ、ビング・クロスビーの歌を愛好した。しかし、おむすびやたくわん、味噌汁もまた彼らの好物であった。ハワイには白人のマジョリティ集団が存在しなかったことから、各エスニックがそれぞれの文化を主張し、維持しやすい社会でもあった。歳時記に見られるように、日系人は仏教会やキリスト教会の新年行事にも中国人町の「水仙祭」、大統領教書にも新年を感じる。ここでは日本、中国、アメリカの文化が混在し、俳句の世界にも多文化が共存するハワイ社会の縮図がはっきりと表れている。本稿では新年の季語のみを扱ったが、引続き四季の季語すべてについて検討することが今後の課題である。

註

- 1) アヘン戦争後の1940年代から精糖プランテーションの出稼ぎ労働者としてハワイに存在したことが記録されている。正式には1851年から受け入れが開始された。1886年のホノルルのビジネス・ディレクトリーによれば、692の企業中219の中国人所有企業が合ったという。
- 2) これらの日本人はおもにオアフ島ホノウリウリ (Honouliuli) およびサンドアイランド (Sand Island) の抑留所に拘禁された。
- 3) 復員兵援護法、1944年に制定された。復員兵に大学教育および住宅資金の給付を定めた法。
- 4) Iで述べたように、先に親（おもに父）がハワイへ渡り、生活が安定してから日本に残した子と呼び寄せるもので、これらの人びとは呼び寄せ一世と呼ばれた。
- 5) 破天、「マウナケア山」、『布哇殖民新聞』1909年8月13日付。
この新聞はハワイ島ヒロで1905年5月7日創刊。創立者は江口一民。
- 6) 『ハワイ歳時記』 p.361.
- 7) 前掲書, p.362.
- 8) 前掲書, p.363.
- 9) 前掲書, p.366.
- 10) 前掲書, p.367.
- 11) 前掲書, p.367.
- 12) 前掲書, p.368.
- 13) 前掲書, p.370.
- 14) ハワイ詩歌集刊行委員会、『鳩』（私家版、ホノルル、1986年）p.137.
- 15) 『ハワイ歳時記』 p.371.
- 16) 前掲書, p.372.支那という表現は歳時記中の記載をそのまま載せたものであることをお断りしておく。
- 17) 前掲書, p.372-3
- 18) 前掲書, p.374.
- 19) 前掲書, p.375.
- 20) 前掲書, p.376.
- 21) 小林英治編、『フィリピン歳時記』、マニラ句会私家版、1989年

参考文献

- 元山玉萩編、『ハワイ歳時記』、博文堂（ホノルル）、1970年
安住 敦、『冬の俳句』、明治書院、1973年

ハワイ日本人連合協会編、『増補再版ハワイ日本人移民史』、ハワイ日本人連合協会、1977年
王堂フランクリン、篠遠和子編、『ハワイ日本人史 1885-1924』、ピシヨップ博物館出版部、
ホノルル、1985年
ハワイ詩歌集刊行委員会編、『官約移民百年記念ハワイ詩歌集 DOVE』、私家版、ホノルル、
1986年
平川巴竹編 『ゆく春歳時記』、ゆく春発行所、1987年
山中速人、『ハワイ』、岩波新書、1993年
中嶋弓子、『ハワイ・さまよえる楽園』、東京書籍、1993年
高木真理子、「多文化的共生の理念と現実－ハワイの場合－」、『思想』1995年 4月号
pp.92-113,岩波書店

DeFrancis, John, *Things Japanese in Hawaii*, University Press of Hawaii, Honolulu, 1973.

Lueras, Leonard, *Kanyaku Imin*, International Loan and Saving Association, Honolulu, 1985.

Nordyke, Eleanor, *The Peopling of Hawaii*, University of Hawaii Press, Honolulu, 1989.

Takaki, Ronald, *A Different Mirror: A History of Multicultural America*, Little Brown and Co.,
Boston, Tronto & London, 1993.

Summary

The first Japanese immigrants arrived in Hawaii in 1868. They worked hard on the sugar plantations to save enough money and return to Japan as the rich. Some 180,000 people went to Hawaii between 1886 and 1924, when Japanese immigrants were totally prohibited. One-half of them returned to Japan, though the others remained in Hawaii. They made efforts to preserve their traditional way of life by living as much as possible in the Japanese style in an alien land.

The Issei, the first generation, built Japanese temples and shrines, opened Japanese restaurants and groceries. They also organized themselves into various clubs and kept doing traditional Japanese activities. They enjoyed Bon dance, flower arrangement, tea ceremony and many kinds of sports. One of them was *haiku* poetry. They made the first *haiku* club on the Ewa Plantation on Oahu in 1901. Since then a lot of such organizations have been kept in every Japanese community.

In 1970 “Hawaii Yukuharu Haiku Society,” which had more than 50-year history, published *the Almanac of Haiku Poetry*. The editor was Gyokushu Motoyama, who was one of the oldest members of

the society. *The Almanac of Haiku Poetry* is the list of the season words used in *haiku*. This almanac tells us what kinds of things Japanese have remained in the Japanese American community. The season words of the New Year were discussed in this essay. Such traditional Japanese season words as “the first sunrise of the New Year’s” , “New Year party” , “a new calendar” are on the list. On the other hand, “Narcissus Festival” held by the Chinese, “President’s New Year Message” and “kites” are not the traditional ones. This shows that the Japanese Americans in Hawaii were affected by the other American culture that surrounded them.